

陸前高田市高田町の一次避難場所としての神社のありかた

○中央大学 学生員 村上 将

中央大学 正会員 平野 廣和

1. はじめに

過去に津波災害に見舞われた三陸の各市町村には、津波一次避難所が数多く指定されている。これは避難後に長期的な避難生活をする二次避難所とは異なり、災害時にまず生命を守るために一次的に避難をする避難所のことである。しかしながら東日本大震災では、この一次避難所が津波に襲われて壊滅する事例が多く、この市町村で発生した。この中でも陸前高田市高田町（以下、高田町）においては、一次兼二次避難所として指定されていた写真-1 に示す市民体育館や市民会館が津波により壊滅的な破壊を受けた。高さ約 10m であるこの体育館は、天井付近を残して完全に津波に飲み込まれ、当時ここに避難していた約 80 人の近隣町民の内、3 人を除く 70 名以上の尊い命が奪われたのである。もっとも高田町の今までの津波災害の少ない歴史を顧みれば、市民体育館を津波避難所に指定することは当然であったのかもしれない。

そこで著者らは、震災発生直後の 2011 年 3 月 20 日以降、高田町を中心として周辺の現地調査を 10 回余り実施し、被害発生から復興への過程を見て来た。特に津波浸水域と非浸水域の境界付近を重点的に調査してきた。図-1 に陸前高田市市街図及び津波浸水範囲を重ねた図¹⁾を示す。ここで注目すべき点は、地図上に追記した線で囲まれた高田町本丸公園(市役所から約 300m)に神社が分布していることである。さらに調査の結果、ほとんどの神社の禁付近で津波の浸水域と非浸水域との境界となっていることである。これと同様なことは、福島県沿岸部²⁾や宇多らの研究³⁾でも指摘されている。

以上のことから、本報では多数の尊い命が失われたことを事実として真摯に受け止め、高田町の一次避難所が市民体育館で適していたか否かを過去の津波被害と併せて再考することである。特に信仰の中心である神社が津波被害を免れたこと、さらに一次避難場所になり得るかにしても検討する。

2. 陸前高田市の歴史的背景

陸前高田市は、かつて陸奥国気仙郡に属しており、江戸時代になると伊達政宗の治める仙台藩の直轄地となった。当時の郡の中心は、現在の陸前高田市の中心である高田町ではなく、代官所が置かれていた今泉村（現陸前高田市気仙町今泉地区、以下、気仙町今泉）であった。なお、気仙町は気仙川河口の左岸に位置している。一方陸前高田市を地形的な観点から見ると、現在の中心地である高田町は、三陸の町としては珍しく気仙川を中心とする 3 本の河川によって広い平地が形成されている地形となっている。

陸前高田市において人的被害を受けた津波は、明治三陸津波（1896 年）、昭和三陸津波（1933 年）、チリ地



写真-1 陸前高田市市民体育館(2011年3月20日撮影)



図-1 陸前高田市市街図及び津波浸水範囲¹⁾

震津波（1960 年）である。明治と昭和の津波の被害は、高田町の南東に位置する広田半島の陸前高田市広田町（以下、広田町）で死者数が最大であった。これに対して高田町の被害は市内で最小であった。これは、伊達藩時代に防砂林として植林された松林（通称、高田松原）が防潮林として機能し、津波遡上を妨げる抵抗となったからだと考えられる。一方、チリ地震津波の際は、一部で松原が津波になぎ倒され津波が旧市役所まで到達したものの、その高さは海水が足につかる程度であり、陸前高田市内の死者は 1 名のみであった。このチリ地震津波を経て、それまでは高台のふもとで今泉街道に沿って形成されていた高田町の集落は、次第に海側へ広がっていったのである。

このように高田町は、これまで大津波の襲来を受けたことはあるが、被害の規模は周辺の三陸の市町村と比較して小さく、高田町民の津波像はチリ地震津波が基準となっていたと推察される。つまり、高田町の人々はこれまで大津波を経験したことがないといっても過言ではなく、心の隅に小さな油断が生じていたのでは

ないか。その結果、高田町の一次避難所が海に近く比較的海拔の低い市民体育館であったので、東日本大震災における高田町の人的被害規模が大変大きくなったのではないだろうか。

3. 新たな一次避難所としての神社

(1) 愛宕神社

写真-2 に愛宕（あたご）神社を示す。

写真(a)は神社の入り口であり、鳥居の足元に一部損傷が見られたことから、津波は鳥居の足元の所まで来ていると推測される。写真(a)では雑草に覆われていて確実には見えないが、左上へ参道を上ると境内へと続いている。参道は比較的整備されており丸太でできた階段になっている。ここを 30m 程度上っていくと写真(b)の社の場所に着く。ここは、おおむね標高 30m 程度あり、津波が来ることはなかった。

(2) 天照御祖神社

写真-3 の本丸公園の神社群の中心といえる天照御祖（あまてらすみおや）神社は、高田町内の神社の中で唯一境内が整備されており、大勢の人々が避難、待機できる程度のスペースを有している神社である。実際にこの場所は、東日本大震災以前から一次避難所に指定されていた神社でもある。

写真(c)に示すようにこの神社は小高い丘となっており、標高 30～40m 程度が確保されている。ここに避難をすれば、確実に津波から身を守ることができたと判断する。写真(d)に境内から高田松原方向を撮影した写真を示す。この間は、直線距離で約 1km の距離であり、海岸から神社の禁までは徒歩で 15～20 分程度である。

(3) 禊瀧神社

写真-4 に禊瀧（みそぎたき）神社を示す。ここは、天照御祖神社と同じ小山に鎮座している神社であり、参道への入り口は前述の二つの神社と異なる場所にある。写真(e)に示す様に、参道へは一般の民家の間の坂道を上って行くことになる。ここで判ることは、周囲の家は無傷であるので、津波がここまでは到達しなかったことである。ただし、神社境内は写真(f)に示す社殿の様に荒れ果てている他、足場のたいへん悪い獣道のような所を上る必要があり、高田町内の神社の中で最も上り難いと言っても過言ではない。

なお、この一帯には禊瀧神社の他、貴船神社、保呂羽様が集合して祀られており、これらを統一的に整備すれば、十分な一次避難所となると考える。

(4) 神社の活用

ここで紹介した 3 つの神社は、全て同じ本丸公園にある小山に鎮座している。しかし、前述の通り参道の入り口は別々である。

神社は、一般に標高が高い小山や森の中に建てられていることが多く、陸前高田市でもその傾向は強い。市内の神社を調査したが、神社の鳥居まで浸水した形



(a) 神社の参道入り口付近



(b) 社周辺

写真-2 愛宕神社



(c) 東側方向から見た参道



(d) 境内から高田松原方向を望む

写真-3 天照御祖神社



(e) 参道へ向かう道（津波被害無）



(f) 荒れ果てた社殿

写真-4 禊瀧神社

跡があったが、全ての神社において社殿まで津波が到達することはなかった。かつてこの地で生活していた先人達は、自らの津波経験を踏まえて信仰の中心である神社を津波の届かない場所に配置したのではないかと推察される。この様に先人達が経験を踏まえたことを鑑み、神社を今後の高田町の一次避難所として指定すべきではないかと提案する。但し、その実現のためには、今残る神社を部分的に改修、特に参道の階段等を中心にして、老若男女が円滑な避難を行えるインフラ整備を行わなければならない。

4. おわりに

本研究では、陸前高田市高田町の津波災害の歴史を振り返り、市内の一次避難所が津波で全壊したことを踏まえて、新たな一次避難所になりうる施設として神社を提唱した。今後も陸前高田市に通い続け、町の移り変わりを直接見ていくとともに、神社を具体的にどのように改修して避難所とするのかを考えていく必要がある。

<参考文献>

- 1) 東日本大震災 復興支援地図, 昭文社, 2011.
- 2) TBS テレビ「報道特集」: なぜ神社の手前で大津波が止まったワケ, 2011 年 8 月 20 日放送
- 3) 宇多他: 2011 年大津波の災害と被災を免れた神社, 土木学会論文集 B3(海洋開発), 2012.